

Title	「ワーク・ライフ・バランス」社会の実現に向けた人材育成の提案
Author(s)	若月, 温美
Citation	年次学術大会講演要旨集, 33: 862-865
Issue Date	2018-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15563
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

「ワーク・ライフ・バランス」社会の実現に向けた人材育成の提案

○若月温美（東葉高等学校）

atsumi_s@mbh.nifty.com

はじめに

誰もがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たす一方で、子育て・介護の時間や、家庭、地域、自己啓発等にかかる個人の時間を持てる、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」のある社会でなければならない。しかし、現実の社会には、安定した仕事に就けず、経済的に自立することができない、仕事に追われ、心身の疲労から健康を害しかねない、仕事と子育てや老親の介護との両立に悩む、など仕事と生活の間で問題を抱える人が多く見られる。

人々の生き方も変化しており、かつては夫が働き、妻が専業主婦として家庭や地域で役割を担うという姿が一般的であり、現在の働き方は、このような世帯の姿を前提としたものが多く残っている。

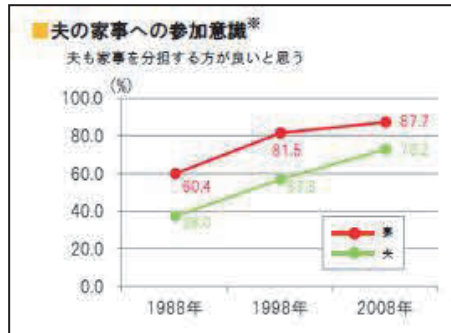
しかしながら、今日では、女性の社会参加等が進み、勤労者世帯の過半数が、共働き世帯になる等人々の生き方が多様化している一方で働き方や子育て支援などの社会的基盤は必ずしもこうした変化に対応したものとなっていない。また、職場や家庭、地域では、男女の固定的な役割分担意識が残っている。

本稿では「ワーク・ライフ・バランス」の社会の実現に向けた人材育成について、高等学校教育の立場から提案をする。

1. 家庭科男女共修世代の家事参加への実態と意識は

「いまだき30代夫の家事参加の実態と意識」（旭化成ホームズ株式会社 くらしのイノベーション研究所・共働き家族研究所 2014年）によると、共働き家族・専業主婦家族の25年前（1989年）と現在（2012年）を比較したところ最も変わったのは夫で、25年前に比べ、全体的に夫で家事をする人が増え、中でもフルタイム共働き家族の夫は、調理・洗濯・掃除のどの分野でも、平日も家事をしていることが明らかとなった。

(図1) 夫の家事への参加意識



(図2) 夫の家事への参加（20年の変化）

■夫の家事への参加（20年の変化）*

「ご主人様はどの程度参加していらっしゃいますか」（よくある・時々ある の小計）

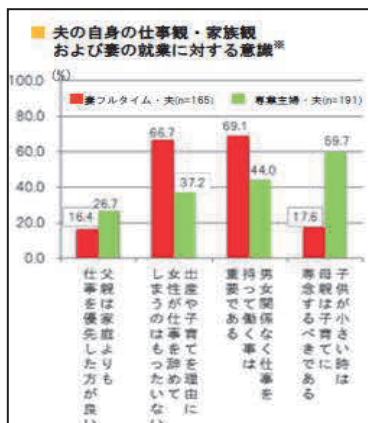
	1988	1998	2008	20年変化
家の戸締り	43.2	52.4	65.6	+22.4
年末の大掃除	49.2	48.7	53.8	+5.6
食料品の買い物	30.3	40.4	48.1	+17.8
ごみ出し	19.7	29.3	38.5	+18.8
風呂場の掃除	14.4	25.3	32.5	+18.1
食事の後片付け	11.9	18.6	27.9	+16.0
布団の上げ下ろし	27.6	30.2	26.8	-0.8
部屋の掃除	15.2	18.1	23.0	+7.8
食事のしたく	13.4	18.1	22.8	+9.4
町内会などへの出席	15.2	15.0	18.1	+2.9
布団干し	16.3	15.0	17.6	+1.3
洗濯	7.9	8.2	14.0	+6.1

20年間の夫の家事・育児への参加意識は大きく変化した（図1、2）

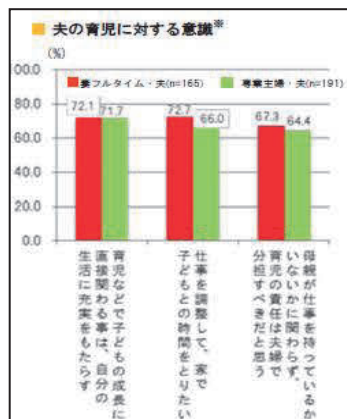
妻がフルタイムで働く夫は「仕事・育児・家事は夫婦協働に担う」という意識を持っている（図3）

妻の就業形態にかかわらず夫も「育児に積極的にかかわりたい」という価値観を持っている（図4）

(図3) 夫自身の仕事観・家族観および妻の就業に対する意識



(図4) 夫の育児に対する意識

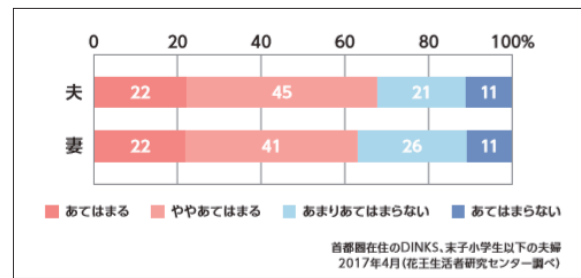


高校で男女がともに家庭科を学ぶようになった「1994年に中学生、高校生だった人はちょうど今、30代。家庭科教育を受け、家事や育児に抵抗のない世代の男性が今、父親となり、カジメンやイクメンになっている」と分析し「いまだき夫は、『家庭科の申し子』と家庭科教育の成果と位置付けており、「持続可能な社会を築くために女性が社会に出て働き、働きながら子どもを産み育てることが求められ、その実現には、カジメン・イクメン

ンの存在は不可欠」と一層の家事・育児への参加の必要性をうたっている。

また「家庭科男女必修世代の夫婦の家事」（花王株式会社 生活者研究センター ファブリック＆ホームケア研究室 2018年）の調査でも、「共働き世帯は引き続き増加傾向にあり、出産後も仕事を続ける女性が増えて」おり、「まず自分たちがどう暮らしたいかを考え、家事はその暮らしを成立させるための大切な仕事」ととらえて」おり『「家事を協力し合うことで夫婦のコミュニケーションが良くなった」と感じている割合は、夫、妻ともに6割以上を占め」ていた。（図5）

これからは、お互いにフォローし合い、夫婦それぞれが臨機応変に家事をし、夫婦それぞれの知識やノウハウを持ち寄り、自分たちの暮らし方に合わせて夫婦で一緒に作り上げていくこと、すなわち、「仕事も家事・育児も」共に行う「ワーク・ライフ・バランス」を重視した生活スタイルが不可欠であろうことが、これらの調査から明らかになったといえる。



（図5）家事を協力することで夫婦のコミュニケーションが良くなった

2. 高校生の家事労働における意識調査

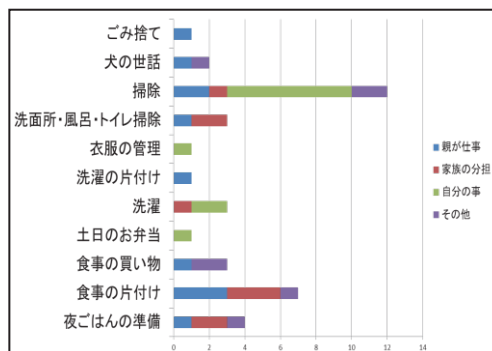
高校 家庭基礎の1年の始めの単元では「家族」について学ぶ。

（図6）はじめに「青年期を生きる」中で「性別役割分業」の考え方とその背景について説明し、この考え方について班で話し合いその結果を発表した。幼少の頃より「男だから」「女だから」と言われてこなかったという生徒が多く、「性別役割分業」の考え方には違和感を唱える意見が多かった。

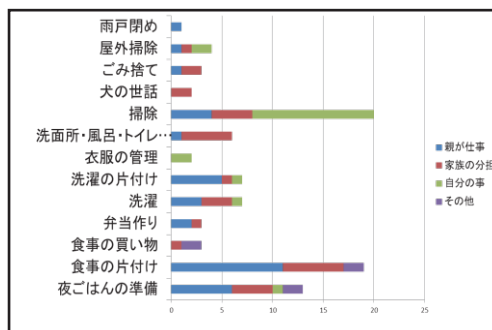
次に、自立にとっては家事労働が必要であることから、今の生活の中でどんな家事労働を誰がやっているかを出し合い、アンケート調査を実施した。

多くは「親任せ」であるが、親が働いているからある程度の家事をやっている生徒が多く（図7、8）「自分のお弁当は自分で作ってくる」と自信をもって言う生徒が男子に多かった。また家事を行うことは、男女ともに家庭生活の中の役割となっており、「食事の片付け」「食事の準備など男子のほうが多く担っていることがうかがえた。「家事内容による男女比」（図9）からも男子のほうが家事を担う割合が多い傾向である。

以上より、現代の高校生の家庭生活において「性別役割分業」を意識した生活行動はほとんど見られなくなっており家事労働においても男女共に担っており、むしろ男子の方がその割合が高い傾向にあるという実態が明らかとなった。



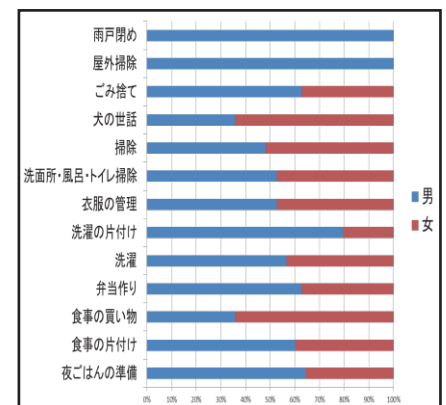
（図7）家事内容とその理由（男子）



（図8）家事内容とその理由（女子）

1	人とかがわって生きる
1	自分らしい生き方と家族
1	自分を見つめる……6
①	これまでの自分を振り返って……6
②	これからの自分をつくる……7
2	自立した生き方、共に生きる人生……8
①	人生80年を生きる……9
②	自分らしく生きること、共に生きること……10
3	共に生きる家族……12
①	家族って何だろう……12
②	パートナーとの出会い……13
③	ライフサイクルと家族……13
④	変化していく世帯の構成……14
⑤	家族の抱える問題とそのサポート……15
4	家族に関する法律……16
①	家族法の理念と背景……16
②	家族に関する法律……17
③	民法改正への動き……19
5	私たちの生活を支える労働と生活時間……20
①	職業に就く……20
②	多様化する就業形態……20
③	家庭や地域での仕事……21
④	共に働く……22
⑤	外部化する家庭機能……23
⑥	生活時間から見えてくるもの……23
	World Note……24

（図6）「新家庭基礎」（実教出版）
目次 1編 人とかがわって生きる



（図9）家事内容による男女比

3. 高等学校学習指導要領から見る家庭科教育の役割

平成 30 年 3 月に高等学校指導要領が公示され、平成 34 年 4 月より年次進行により段階的に適用されることとなった。「仕事も家事・育児も」共に行う「ワーク・ライフ・バランス」を重視した生活スタイルの確立に重要な役割を果たしてきた家庭科教育の内容はどのようになっていくのであろうか。

3.1. 家庭科の目標

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

○様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成するとは、

従前においても、男女共同参画社会の推進を踏まえて、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解するとともに、生活に必要な知識と技能の習得を通して、共に支え合う社会の一員として主体的に行動する意思決定能力を身に付け、男女が協力して家庭を築いていくことを認識させ、家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育てることを示しており、・・・

(1) 人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。

○家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深めとは、

生命を育んだり生活をしたりする基盤としての家族・家庭の意義について理解を深めるとともに、家族・家庭が社会との関わりの中で機能していることについて理解を深めることができるようにすることを意味している。

・・・家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め、性別や世代を超えて、男女が家族や社会の中で平等な関係を築き、共に生きる社会の一員として役割と責任を果たし、家庭や地域の生活を主体的に創造していくことが重要であることを認識させることを重視している。

○家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにするとは、

生活を営むために必要な、家族・家庭、衣食住、消費や環境などに関する知識と技能を実践的・体験的な学習活動を通して習得できるようにすることを意味している。高等学校段階では、小学校、中学校における学習の上に立ち、生活に関わる経済的な視点や生活文化の継承と創造の視点を踏まえて、持続可能な社会の構築に向けて、科学的な根拠に基づいた実践力を身に付けることが重要である。

3.2. 高校 家庭基礎 2 単位

1 科目の性格と目標

(1) 科目の性格

この科目は、少子高齢化等の社会の変化や持続可能な社会の構築、食育の推進、男女共同参画社会の推進、成年年齢の引下げ等を踏まえて、生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解と技能を身に付け、課題を解決する力を養い、生活の充実向上を図ろうとする実践的な態度を養うことにより、家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成する科目である。

また、生涯の生活設計の学習を科目の導入としても学習することで、現在を起点に将来を見通し、ライフステージに応じた衣食住の生活に関わる理解や技能の定着や、生涯にわたってこれらの力を活用して課題を解決できるよう内容の改善を図った。

(2) 目標 第1 家庭基礎

1 目標

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

○よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家族や地域の生活を創造する資質・能力とは
家族・家庭、衣食住、消費や環境など生活に必要な知識と技能を習得し、それらに関わる思考力、判

断力、表現力等を育むことを通して、男女が相互に協力し、共に支え合う家族や社会の一員として、主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを意味している。

1) 人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活・環境などについて、生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする

○人の一生と家族・家庭及び福祉・衣食住、消費生活・環境などについて、生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能について

この科目は、基礎的・基本的な学習内容から構成されており、内容「A人の一生と家族・家庭及び福祉」「C持続可能な消費生活・環境」に示された事項の学習を通じて、基礎的・基本的な知識と技能を確実に身に付けさせることができるようにする。

2 内容とその扱い

A 人の一生と家族・家庭及び福祉

(1) 生涯の生活設計

ア 人の一生について、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解するとともに、自立した生活を営むために必要な情報の収集・整理を行い、生涯を見通して、生活課題に対応し意思決定をしていくことの重要性について理解を深めること。

○人の一生については、

生涯発達の視点に立って、乳児期から高齢期までのライフステージの特徴と課題を見通し、その課題を他者と関わりながら達成しつつ、生まれてから死ぬまで発達し続けていくという考え方を理解できるようにする。

○自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があること

ライフイベントや人生の転機、あるいは家族の変化や社会変動などによって生じる課題を乗り越える際に、誰もが同じような方法や選択で達成するのではなく、その時の身近な他者や社会との関わりを通して一人一人が異なる過程をたどり、様々な生き方があることを理解できるようにする。

イ 生涯を見通した自己の生活について主体的に考え、ライフスタイルと将来の家庭生活及び職業生活について考察し、生活設計を工夫すること。

○自分の目指すライフスタイルを実現するために、ライフステージの特徴と課題やライフイベントと関連付けたり、職業選択、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）などの具体的な事例を取り上げたりして考察し、生活設計を工夫することができるようにする。

○生活設計の実現には、様々な社会的条件が大きく影響することにも触れ、生活設計を通して社会の動きを見つめ、広い視野をもって生活を創造していくことや不測の事態にも柔軟に対応する必要性を認識できるようにする。

仕事と生活の調和の実現のためには多くの課題があり、官民一体となって取り組んでいかなければならない。その課題の一つには、女性の職域の固定化につながることをないように、仕事と生活の両立支援と男性の子育てや介護への関与の促進を進めることが必要である。高校家庭科教育がその役割を今後も担っていくことが学習指導要領の内容から明らかであり、受験勉強に特化した高校教育を見直し、よりよい社会の構築に向けて、男女ともに主体的に家庭や地域の生活を創造する力を育成する教育に再編していくことを提案したい。

参考文献

「仕事と生活の調和」推進サイト（内閣府） www.cao.go.jp/wlb/index.html

「いまどき 30 代夫の家事参加の実態と意識」（旭化成ホームズ株式会社 くらしイノベーション研究所 共働き家族研究所 2014 年） <https://www.asahi-kasei.co.jp/j-koho/kurashi/report/K040.p>

暮らしの現場レポート「家庭科男女必修世代の夫婦の家事」（花王株式会社 生活者研究センター

ファブリック&ホームケア研究室 2018 年）

<https://www.kao.co.jp/lifei/life/report-43/>

「高等学校学習指導要領解説家庭編」平成 30 年 文部科学省